

研究課題名「間質形成に関与する蛋白質の癌間質マーカーとしての臨床応用に関する観察研究」に関する情報公開

1. 研究の対象

1995年4月1日～2017年3月31日に当院で膵癌の治療を受けられた方

2. 研究目的・方法

「研究の目的」

膵癌の唯一の根治療法は外科的完全切除ですが、診断時すでに局所浸潤、遠隔転移を来していることが多く、切除率は15～20%にとどまります。膵癌の診断はCT、超音波内視鏡検査（内視鏡に超音波検査のプローブがついているものを超音波内視鏡（EUS）といいます）などの比較的侵襲のある画像診断に頼るところが大きいのですが、腫瘍マーカーは非侵襲的な検査であり、その進歩は膵癌早期診断に大いに寄与します。残念ながら現状では、膵癌診療ガイドライン2013年版にもあるように、腫瘍マーカー測定は早期発見の手段として満足できるものではないとされており感度の高いマーカーの開発が望まれています。

近年腫瘍の発育には癌間質が大きく関与することがわかってきました（癌細胞の周囲は「間質」という組織で取り囲まれており、これまでがん研究は、間質に包み込まれた癌細胞を対象とし、間質自体にはあまり注意が払われてきませんでした）。膵癌は癌の間質を多く含む腫瘍であり、早期癌の時点で豊富に形成します。従来とは異なる新たなアプローチとして、癌間質に発現する蛋白質が早期膵癌の腫瘍マーカーとなる可能性が指摘されています。早期癌の時点で癌を発見することができるようになれば多くの膵癌患者さんにとって早期手術が可能となり予後の大幅な改善が期待できます。

また、膵癌は化学療法が効きにくい腫瘍としても有名です。理由としては癌間質が関与しているといわれています。癌間質を減らすことができるようなタンパク質を発見できれば抗癌剤の効果が上がり、膵癌患者さんの予後の改善に大きく貢献できます。

「研究方法」

人血清を用いて、ELISA法等により腫瘍マーカーとして使用することが可能かどうかを調べます。感度のよい腫瘍マーカーができれば、手術できる方が増え膵癌患者さんの予後がよくなることが期待できます。超音波内視鏡下穿刺生検法の検体の一部を使用し癌間質を形成するタンパク質の解析をし、病理標本からは免疫組織染色により間質のタンパク質の性質を調べます。

「研究期間」

2015年10月21日から2022年10月21日

3. 研究に用いる試料・情報の種類

試料：血液、FNA 生検検体

4. お問い合わせ先

本研究に関するご質問等がありましたら下記の連絡先までお問い合わせ下さい。
ご希望があれば、他の研究対象者の個人情報及び知的財産の保護に支障がない範囲内で、
研究計画書及び関連資料を閲覧することが出来ますのでお申出下さい。

また、試料・情報が当該研究に用いられることについて患者さんもしくは患者さんの代理人の方にご了承いただけない場合には研究対象としませんので、下記の連絡先までお申出ください。その場合でも患者さんに不利益が生じることはありません。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先：

名古屋大学医学部医学系研究科消化器内科学 医師 水谷 泰之

連絡先：

〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町 65

名古屋大学大学院医学系研究科 消化器内科学

TEL：052-744-2172 FAX：052-744-2180

苦情等の受付先：名古屋大学医学部総務課 TEL：052-744-1901

研究責任者：

名古屋大学医学部附属病院光学医療診療部 廣岡 芳樹